

祈りの友 第189号

2023年1月

砕かれたものを用いられる神②

(絶版教材「砕かれたものを用いられる神」より)

②こわされた石膏の壺

さて、イエスがベタニアで、ツァラアトに冒された人シモンのおられたときのことである。食事をしておられると、ある女の人が、純粋で非常に高価なナルド油の入った小さな壺を持って来て、その壺を割り、イエスの頭に注いだ。マルコ14章3節

私たちは、子どものときからマリヤと香油の話が大好きです。

香油の入っている壺は石膏の壺で、香油の香りが蒸発しないように、しっかりと、壺の口が密封されていました。マリヤはこの壺をこわし、素晴らしい香りを部屋いっぱいに満たしたのです。

この壺は私たちのからだを表し、その香りはキリストと共なる生活を示しています。

壺が壊されなければ、どうして部屋に香りが満ちるのでしょうか？私たちは完全に主にお従いするために砕かれなければなりません。F. B. マイヤー博士は、英国のミッドランドの町で牧会をしていたときのことを、このように語っています。

「私は決して幸福ではありませんでした。というのは、私はただ毎月の給料と自分の地位のために働いていたからです。ある日、ハドソンテラーと若いふたりの学生が私のもとに来ました。この人たちは、私がまだ持っていない力と喜びを持っていました。」

マイヤー博士が彼らにいろいろとたずねた結果、その学生の一人チャールズ・スタッドが、次のように答えました。

「マイヤーさん、私はあなたが持つことができないものを持っているわけではありません。」

「ではどうしたら、私もそれを持つことができるのでしょうか。」

「そうですね。あなたは、自分自身を神に完全にささげておられますか。」

マイヤー博士は、自分が神にささげたくないものを持っていることに気づきました。その夜、博士は自分の部屋で神のみ前にひざまずき、キリストに『鍵のついている意志』というキーホルダーをお渡ししました。

しかし、一つの鍵だけは、とっておきました。それは自分の心の戸棚の鍵でした。

「これは全てですか？」と主は言われました。「全部です。でも一つだけ別にしてあります。」

「それは何ですか。」

「それは一つの小さい戸棚の鍵です。その中には、主よ、あなたに関係のないものが入っています。それは私のものです。」

それから博士が続けて祈ろうとしたとき、主は言われました。

「子よ、もしあなたが、私にすべてを任せられないのなら、あなたは少しも私を信頼していないのです。」

「やめてください！」博士は叫びました。

「私はそれをささげることができません。しかし主よ、もしあなたが、それを取られるのでしたら、お取りください。」

主は、それを取られました。マイヤー博士は続けてその当時のことをこのように語っています。

「それから一カ月のうちに神は、長い間、私の小さい戸棚にあった自分だけのものをすっかりきれいに取り去ってくださいました。」

私は主が私の全てを必要とされていることを知りました。後年、あのときささげたものに出会ったとき、私は自分自身が、一杯の汁のために長子の権利を売ったあの愚か者になるどころだったことを知らされました。

あの晩、『はい』と言ったときにすべてのものを持つものになりました。それからはいつも私が主に『はい』と言うようにつとめて来たの

です。

神がマイヤー博士を砕かれたときに、香りが部屋に満ちたのです。そしてそのすべてをささげた甘い香りは、マイヤー博士が天国に帰った後もずっと香り続けています。

神は砕かれたものを用いられるのです。

③砕かれた壺

彼は三百人を三隊に分け、全員の手角に角笛と空の壺を持たせ、その壺の中にたいまつを入れさせて、彼らに言った。「私を見て、あなたがたも同じようにしなければならない。見よ。私が陣営の端に着いたら、私がするように、あなたがたもしなければならない。私と、私と一緒にいるすべての者が角笛を吹いたら、あなたがたもまた、全陣営を囲んで角笛を吹き鳴らし、『主のため、ギデオンのため』と言わなければならない。」真夜中の夜番が始まる時、ギデオンと、彼と一緒にいた百人の者が陣営の端に着いた。ちょうどそのとき、番兵が交代したばかりであったので、彼らは角笛を吹き鳴らし、その手に持っていた壺を打ち壊した。三隊の者が角笛を吹き鳴らして、壺を打ち砕き、左手にたいまつを、右手に吹き鳴らす角笛を固く握って「主のため、ギデオンのための剣」と叫んだ。

士師記 7 章 16 節—20 節

ギデオンの戦いの装備は何と奇妙なものだったでしょう。それは壺、たいまつ、ラッパでした。

ギデオンがラッパを吹くと同時に三つの隊がラッパを吹き、壺を砕き、たいまつを高くかけたのです。この壺は私たちの体を表し、たいまつは内にある神のいのちを表しているのではないのでしょうか。私たちが砕かれなければ神の光は輝き出ないのです。

かつてある人がジョージ・ミューラーに彼の奉仕の秘訣をたずねました。ジョージ・ミューラーは、このように言いました。

「ある日、私は死んだのです。その日私ジョージ・ミューラーは自分の意見、好み、意志、

経験に対してまったく死んだのです。また世の賞賛と非難に対しても死にました。それから私は、ただ神が認められる私自身をのみ示すように学んで来たのです。」

子どもたちをキリストに導くためにすばらしい働きをし、人々に感化を及ぼしたフランシス・ベネットは、よくこのように語りました。

「あなたが自分自身の葬式に行くことはどんなに大切なことでしょうか。」

私たちも自分に死ぬことによって始めて主に用いられることができるのです。

C E F の創立者、オーバー・ホルツァーは、「神が世界の子どものための救いのために彼を通して働いてくださるよう、神がお用いくださるところに、人々にののしられるような働きのある場であっても行かせてください。」と願っています。あなたはこのような祈りをささげられるでしょうか。

あなたはこのような価を支払いたいと思えますか。あなたは誤解されたり、中傷されたりすることを願うでしょうか。あるいは、キリストの力によってキリストにある生活を送ろうと願われるでしょうか。不正な中傷や非難に対して最も明確なそして有効な答えは、キリストのために生きる生活をする事です。

まことに正しいことであろうと、不正なことであろうと、他人の批評を心よく受けられる人々を見出すことは難しいことです。

また批判する人に対して悪い感情を持たないで、その批判を受けられる人々を見出すこともまれです。これらのことは私たちが自我に対して死ぬときにのみ可能になるのです。

神の御手のうちにある壺が砕かれてはじめて神の光は輝くのです。神はまことに砕かれたものを用いられるのです。

次回は、④「壊された屋根」

⑤「砕かれた城壁」

(新改訳 2017 を使用)